

---

# 怖い

天津水。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怖い

### 【Nコード】

N0425M

### 【作者名】

天津水。

### 【あらすじ】

幼少の頃より、恐ろしくてたまらなかった。私は、自分が狂っているとは思わない。だってしょうがなかったのだから。

死の恐怖は誰にでも平等に訪れる。しかし、私には他の人間が、どうしても私のような恐怖を味わっているとは考えられなかった。みんな能天気な顔をして、今にも気が狂いそうな私の心など、彼らには分かりもしまいと、よく思ったものである。

私という存在は、とある地方の良家に端を発する。私は人から見て、家柄以外はとにかく平凡な人間であった。学校の成績も平凡、運動神経も平凡、性格も平凡そのものであった。ただ一つ、私の大きな悩みを除いては。たとえ学校で皆に囲まれて朗らかに笑っていても、心の中ではドロドロとした粘液みたいな恐怖が、心を隙間なく覆っているのだ。

そんな体たらくだから、私は昔から何一つ物事を純粹に楽しめなかった。みんなで鬼ごっこをしている時も、かくれんぼをしている時も、私は実は怖くてそれどころではなかったのである。しかも、その恐怖はあまりに漠然としていて、それ故に手の施しようが無い。

道路を歩いていたら車に撥ねられるかもしれないとか、高いところからうつかり落ちて死んでしまうかもしれないとか言うのではない、ある種で馬鹿らしいと笑われる類の、正体不明の者が自分を突然襲って心臓を抉りだしてしまうんじゃないだろうか、と言った類の恐怖である。

小さい頃は周りにこの恐怖を訴えた事もあったが、皆苦笑いして「大人になれば治るよ」なんて言うだけだった。その頃から既に人に頼る事は諦めていたと思う。

そんな恐怖に苛まれる小学生時代、ある転機を得る。いつもの学校の帰り道のことである。私は途中、道路の真ん中に白い物体が横たわっているのを見つけた。ふわふわした、綿毛のようなものである。気になって近付いてみると、それは兎だった。人間の世界に勢いよく飛び出してきたところ、運悪く車に撥ねられてしまったのだろう。ぴくりとも動かない耳を見て、足を見て、そうして私は、何故か深く安心した。

この兎は死んでいる、だが私は生きている。自分はこの兎と違って、確固として存在している。言うなれば、初めて生きた心地がしたのである。矛盾しているような気もするが、私は他の生物の死を見て、自分の得体のしれない恐怖を、一時忘れる事が出来たのである。

それから動いている動物を見ると、こつそりと殺していた。そのたびに私は自分の生を実感し、誰も私の心臓を抉りだしたりしない、と地に足をつける事が出来た。しかし時間が経つと、やっぱりまた死の恐怖が襲ってくる。ある意味で私は他の死を見つめた時だけ、正気に戻っているのではなかったのではないだろうか。

しかし、そんな時間も終わりが来る。学校を卒業し、定職に就かなければならなくなった時、ついに都会に出ることになった。都会に出るからは動物の死体など目にする事は無く、動物に会う事すら無かった。私はまた昔のように、常に恐怖に怯えるようになった。頭をよく掻くようになり、出血してしまう事もあった。それでも皆の前ではそれなりに振舞ったため、人望はそれなりにあった。ただ、私にとっては、それは何の意味もない事だった。

ある仕事を終えた夜遅くの事である。私は公園を通りかかったところで、例の得体のしれない恐怖に襲われた。水飲み場に手をつい

て、やがて胃の中身を盛大にぶちまけた。そうして、えずいている所、声を掛けられた。

「あの、大丈夫……ですか？」

振り向くと、それはまだ年端もいかない少女であった。可憐で、脆い印象を持つ少女だった。強く握っただけで壊れてしまいそうなと言えれば分かるだろうか。私は水で口を濯いでから、大丈夫と短く返事をした。しかし、私は疑問に思った。なぜこの少女はこんな時間に、公園なぞに居るのだろう。見る限り、とても夜遊びなどやるタイプには見えない。私は思い切って彼女にその理由を聞いてみた。返ってきた理由は至極単純なもので、家出だった。彼女は悲しそうな顔をして、その内容を語り始めた。

「父が、よく暴力を振るうんです。毎日、毎日。最初は四人だった家族が、母が逃げ、弟が死んで、私と父の二人だけになりました。もう、耐えられません」

私はそれに対して、家を出てどうするのかと聞いた。彼女は苦笑いをして、「分かりません」と答えた。

「とにかく、父に見つからないところまで逃げようと思います。あの人、あれで執着心は強いから、私を連れ戻そうとするだろうし。もし捕まったら、今よりもっと酷い目に会うだろうし」

私はそうか、と言って彼女の顔を見た。そこで私は、はっとした。

この娘は、まるであの兎だ。

か細く、弱く、しかし住む場所を追われ、そして……死ぬ。ああ、そう言えば、まだ人を殺した事は無かったな、とぼんやりと私は考えた。私はあの兎を思い起こしながら、ゆっくりと彼女の首に手を

伸ばした。最初、彼女は何をしようとしているのか分からない様子だった。しかし、土の上に押し倒した瞬間、彼女の表情が変わった。私は彼女のか細い首に、思いっきり力を込める。バタバタと足がのたうち、手指は私の腕を払いのけようとする。その必死の抵抗が弱まってきて、やがて彼女は死んだ。

ああ、生きている。

私は随分久しぶりに、その充足を得たのだ。

それから、私は何度か人殺しを続けた。人を殺して得る安心感は、動物のそれとは比べ物にならなかったのだ。ただ、そんな行為が、ばれないはずが無かった。ある日、私は二人組の警察に逮捕された。片方は2mほどもある精悍な顔をした男だったが、もう片方は女顔で160cmほどしかない男だった。彼らは神妙な顔をして私を警察車両に乗せて行った。これ以降、私は、いわゆる娑婆の世界には戻ってこなかった。

それからは色々あった気がするが、どうも記憶が確かでない。覚えてるのは、死刑を宣告され、段々と己に迫ってくる死に怯え、何度も頭を壁に打ち付けたり、己の体をあちこち掻きむしったことぐらいである。刑務所内には自殺、自傷防止用の監視カメラがあり、それらの行為も、命を失うほどではなかった。いっそ、己から命を断とうかとも思ったが、先述の監視カメラと、持ち前の生存本能がそれを良しとしなかった。

やがて、私にもついに死刑執行の日が訪れた。方法は絞首刑だった。刑が執行され、私の首に縄が掛かる、驚くべきことに、苦痛はなく、一瞬で目の前は暗くなった。

私は、己の記憶を見ていた。今まで体験したことが、次々に意識に流れ込む。どうやらこれが走馬灯らしい。こうなってみると、あ

れほど恐怖していた死が、その実大した事は無かったような気がする。私は目を閉じ、完全なる死を待った。

そこで私は、何か妙な感覚を覚えた。ゆっくりと目を開ける。

そこには、私が殺したモノたちが、蛆を這わせた姿で立っていた。

「  
」

それが、私に向かって何かを言った。聞き取れない。それが私に手を伸ばす。私は動けない。恐怖しか感じない。私は狂ったように暴れまわったが、どうしようもできない。そこで、やっとそれが、何と言っていたか分かった。

「ナンデ？ ナンデ？」

それは、『なんで』と言っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0425m/>

---

怖い

2011年1月25日07時42分発行